

リヒター博士をご追悼申し上げる

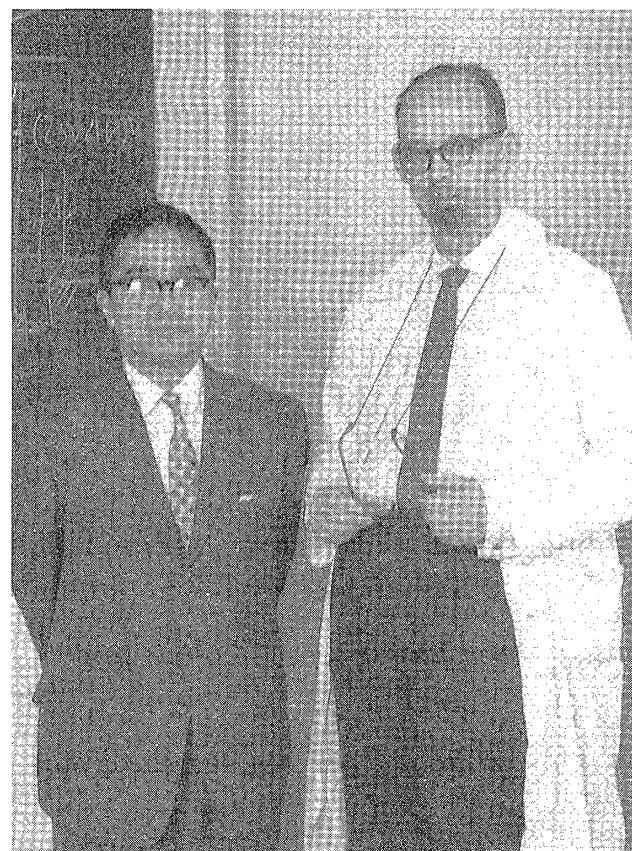
東 喜 名誉会員

ドイツ色彩学界の長老であり、長い間最高峰の色彩学者として多方面から尊敬されていた Manfred Richter 博士が、1990年8月24日にご他界された。87歳の高齢であられた。実に痛恨の極みであり、世界の色彩学界にとって大きな損失である。博士のご生涯に果たされた大きなご功績を讃えて、遅ればせながら深甚の哀悼の意を表します。

博士のお若い時期における色の研究の一成果は、リヒター色度計（カール・ツァイス社製品、1938年ころ）として世に現れたが、拙著“色”（1947年）の中で私は、世界各種の視覚色度計を比較検討した結果、これを最高性能を有するものと結論したことがある。また、博士の名著“Grundriss der Farbenlehre der Gegenwart”（現代色彩学の基礎、1940年）は当時の色彩学界では最も頼りになる色彩学専門書の一つであって、世界の同学界を風靡したものである。

博士及び同士グループが多年に亘る研究をまとめた結果、1955年ドイツ工業規格 DIN 6164 Farbenkarte が制定された。これは色相 (Farbton, T)，飽和度 (Sättigungsstufe, S) 及び暗度 (Dunkelstufe, D) を三属性とする独特の体系であるが、オストワルド色票系の長所を残しながら、DIN 表色系と密接に関連するように工夫されたものであって、注目すべき色票系である。以後、博士は、この DIN 色票系と技術雑誌 “Farbe” の普及に主力を注がれた。

1959年のDIN ブリュッセル大会に出席した旅行の中で、私は博士をベルリンの連邦材料試験所の研究室に訪ねて、親しく色彩学を話し合ったが、その時の手記⁽¹⁾を最後に再録させて頂く。私は開口一番、DIN 表色系をCIE系へ変換した時に、何故等しいTの軌跡がすべて直線になるのかと尋ねた。博士は、それは順応の問題であると答えられた。私はさらにTは主波長を意味して色相ではないのかと尋ねると、いや両方の意味があるとの返事であった。博士は最近 DIN の色票チャートができたといって、黄の等下面を見せて、



若き日のリヒター博士と筆者。1959年、ベルリンにて。

これが等色相面に見えないかと逆襲された。私は確かに等色相面にも見える、しかしこの色相はマンセルの10Yに近く、10Yは色相不变 (hue invariant) であるから等Tと等色相が一致するのは当然だといったら、博士は苦笑してうなづかれた。討論はさらに続き、博士は一つの英単語を思い出すべく独英辞書を引かれたが、出てこなかった。遂に二人の英語会話の限界までてしまったわけで、話をここで中止して、研究室内を案内して頂いた。

博士の長身瘦躯、明朗で親しみ深いお姿が思い出されて懐しさがこみ上げてくる。

リヒター博士のご冥福を再びお祈りします。

(1) 東：照学誌43（昭34）560